一復史料

# 沖縄作戦記録

昭和二一・八

防衛研修所戦史室

2300C-2
5-1
沖自
沖縄
8

# 沖縄作戦記録

昭和二十一年八月
第一復員局

「註」

本記録は元第三十二軍參謀神中佐（作戰間東京に連絡の爲派遣せらるゝ）が僅少なる日誌資料を基礎として一應作成せるも誤謬及不備の點多きを以て其の後元第六航空軍參謀水町勝城中佐之に所要の補修を加え更めて作成したるものなり、尙沖縄作戰に關しては本記録と共に第十方面軍作戰記録（臺灣）及び日本本土よりする南西諸島に對する航空作戰記録（第六航空軍）を併用すること必要なり

目次


第一章　作戰準備及指揮系統の變更
第二章　作戰思想
第三章　南西諸島に對する兵力の增强
第四章　作戰開始前の情勢
第五章　作戰計畫の概要
第六章　兵團の素質
第七章　築城及訓練
第八章　作戰經過
一、空襲開始より沖縄本島上陸迄
二、敵の沖縄本島上陸より主陣地前迄の作戰
三、第一次攻勢中止の經緯
四、第二次攻勢中止の經緯
五、第三次攻勢の經緯

六、敵の我主陣地に對する攻撃發起
七、敵の攻撃頓挫時より軍の五月四日攻勢前迄の戦闘
八、軍の五月四日よりする攻勢と其の經過概要
九、首里最後の攻防と戦線縮少の經緯
十、島尻地區の軍の終焉戦闘

附圖第一　沖縄作戦經過要圖（上4－1下4）
同　右（國頭地區）（中4－1下4）
同　右　（下4－1 17/5）
附圖第四　沖縄五月四日五日戦闘經過要圖
附圖第五　沖縄作戦經過要圖（下5－1中6）

第一章　作戦準備及指揮系統の變更

一、一九四四年米軍のトラック島空襲後大本營は將來南西諸島方面に作戦波及の時あるを考慮し三月下旬十號作戦準備要綱を定めたり

右十號作戦準備の目的は南西方面我國土防衛及南方圏との交通確保の爲臺灣及南西諸島方面に亘る作戦準備を強化し以て先つ敵の奇襲に備ふると共に情勢の變轉に方り敵の攻略企圖を撃碎し得るの態勢を整ふるに在りて之が爲當時未だ着手せられあらざる該方面航空作戦準備を最重點として概ね七月迄に之を概成せんことを企圖せられたり

二、第三十二軍は如上の目的達成の爲三月下旬大本營直屬として新に編成せられ南西諸島に配置せらる

註　軍司令官は渡邊正夫中將、軍參謀長は北川潔水少將にして軍司令部は那覇郊外に位置す

三、南西諸島方面作戦準備に必要なる軍需品及資材等は當初主として本

土より輸送せざるべからざる關係上同年五月十日第三十二軍は西部軍司令官（防衛總司令官隷下）の指揮下に入らしめられ次で戰局サイパン及ビアク兩方面に波及し捷號作戰準備即比島、連絡圏域及本土方面決戰準備の實施となるに及び同年七月十五日第三十二軍は臺灣軍（九月以降第十方面軍となる）戰鬪序列に入らしめられて南西諸島に於ける捷二號作戰準備の實行を擔任し航空基地の設定と兵力の增強に伴ふ地上作戰準備の實施に努めたり

四、一九四五年二月初頭東支那海周邊地域に於ける航空作戰（天號航空作戰と稱呼す）準備の示達に伴ひ之に應ずる戰備の急速完成を圖ると共に地上兵力を以て確保し得ざる伊江島飛行場を破壞し又完成濟れたる沖繩南及東飛行場の設定を中止せり

## 第二章　作戰思想

一、南西諸島全般作戰に關しては大本營はレイテ作戰生起迄は決戰を指導する如く考慮せるも爾後全般の作戰推移と我戰力及離島作戰の特性とに鑑み一九四五年初頭に於ては敵に大出血を强要する戰略持久の思想に轉移せり

二、沖繩島に於ける兵力運用は當初來攻する敵を擊破して航空基地を確保する如くなりありしが爾後兵力の減少等に伴ひ沖繩島南部を確保する如く變更せり

## 第三章　南西諸島に對する兵力の增强

一、南西諸島に對する地上兵力の增强は一九四四年五月以降概ね九月迄の間概要左の如く行はれたり（日次は發令日を示す）

五月三日　獨立混成第四十四旅團（內地）沖繩島
獨立混成第四十五旅團（內地）石垣島
獨立混成第二十一聯隊（內地）德之島
右の內兩混成旅團は六月末頃內地より輸送途中奄美大島附近に於て大部海沒し內地に於て再編成せ

られて派遣せられ又別に内地に於て動員せられあ
りし獨立混成第十五聯隊を沖縄に派遣せられたり

六月二十六日　第九師團　（滿洲）　沖縄島
六月　三十日　第二十八師團　（滿洲）　主力宮古島　歩一聯　大東島
七月十八日　第二十四師團　（滿洲）　沖縄島
七月二十四日　第六十二師團　（北支）　沖縄島
獨立混成第五十九旅團　（内地）　宮古島
獨立混成第六十旅團　（内地）　宮古島
獨立混成第六十四旅團　（獨立混成第二十一聯隊改編）　德之島
又五月より九月の間戰車、軍砲兵、遠射砲、高射砲等軍直諸部隊
を内地、滿洲等より派遣せられ主力を沖縄島に一部を夫々先島群
島、德之島に配置す

二、比島決戰に伴ふ在臺灣骨幹兵團たる第十師團及第六十八旅團の比島
方面轉用は臺灣防衛兵力補塡の爲第十方面軍をして第三十二軍より



戰略兵團の抽出を企圖せしめ大本營及第三十二軍と臺灣軍との間に
接衝を經たる後方面軍は遂に一九四四年十二月三日第九師團の臺灣
派遣を命ずるに至り同師團は十二月上旬より一月上旬に亘り臺灣に
移動せり

第三十二軍最精鋭たる第九師團の抽出は沖縄島の防禦に致命的影響
を及ぼし軍は沖縄(北)及(中)飛行場の確保を事實上放棄するに至りたり

三、航空部隊の狀況

一九四四年六月末以降第二十五飛行團主力（飛行第三、第二十戰隊）
は沖縄島及宮古島に展開し海上交通保護作戰に任じたる後比島方面
情況緊迫に伴ひ九月末臺灣に集結し之に代り獨立飛行第二十三中隊
（戰闘一）沖縄(北)飛行場に在りて該任務に服せしが十月十日米機動部
隊の沖縄空襲に方り募兵之を邀撃し殆ど戰力を消耗せり
爾後南西諸島には飛行部隊配置せられずして經過し米軍沖縄來攻直
前に於ては第八飛行師團の特攻隊若干の宮古島及石垣島推進を見た

るに過ぎず

十號作戰準備以後南西諸島各飛行場には逐次第八飛行師團隷下の航空地區、通信、整備、修理各部隊を配置せられ又沖縄(北)飛行場には航空路部隊及氣象機關位置しあり

## 第四章　作戰開始前の情勢

一、大本營は比島作戰の推移に伴ひ一九四五年初頭敵の次期來攻は南西諸島方面なるべく其の時期は四月上旬以降と判斷して天號航空作戰を計畫し、又第十方面軍は三月中旬頃には沖縄又は臺灣の一角に對する攻略作戰の開始可能なるべしと判斷せり

第三十二軍に於ては當初右時期以前に敵の來攻あることを考慮し作戰準備を促進せり

二、三月十八、十九日米機動部隊は九州、四國方面を空襲せるも第三十二軍に於ては之を以て沖縄本島上陸直前の準備空襲と判斷しあらず蓋し大本營よりの情報放送は單に中、南部太平洋方面の船團の動き



活潑なりと言ふに過ぎず且九州、四國の空襲期間よりして機動部隊は本格的上陸の爲にはウルシー方面に爆投補給を要すべしと判斷せるを以てなり

## 第五章　作戰計畫の概要

一、軍全般の兵力部署

沖縄本島には24D 62D 44MBsを、德之島には64MBsを、宮古島には23D 59MBs 60MBsを、石垣島には45MBsを、南大東島には步兵一聯隊强を夫々配置し宮古、石垣兩島の兵力は、先島集團長第二十八師團長）之を統轄し又德之島守備隊より沖永良部島に一大隊、與論島に一小隊、喜界島に一部を派遣す

二、沖縄本島の兵力配置

(1) 首里周邊に62D、知念半島に44MBs、喜屋武方面に24Dを配置する三點防禦の思想にして小祿附近は海軍守備隊約八、〇〇〇を以て同方面